

琉球大学学術リポジトリ

[抄録] タンザニカにおけるサトウキビ害虫カンシヤシロマルカイラムシの最近の大発生について

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東 (抄録) メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015644

タンザニカにおけるサトウ キビ害虫カンシャシロマル カイラムシの最近の大発生 について

(D. W. Fewkes; Proc. Intern. Soc.
Sugar cane Techn. 14th Cong. 1971)

カンシャシロマルカイガラムシ (*Aulacaspis
legalensis*) はごく最近になって 経済的に重要害虫と
なったが、それは50年程前に東南アジアから東アフリ
カに侵入してきたものである。1969~1970年の間のタ
ンザニカの **Planting Company Ltd(TPC)**でのこの
害虫の大発生による被害は砂糖生産高の約3分の1の
減産の原因となった。本虫はサトウキビの茎につき、
普通ゆるんだ葉鞘の保護をうけている。生活環は卵
期、めすでは2幼生期、おすでは4幼生期、成虫期が
ある。TPCでの生活環には卵から成虫までの経過

は、季節によって大体3~5週間を必要とする。

交尾しためすの卵が成熟するまで10日間の産卵前期
間がある。産卵は約10週間にわたって一様に続き、1
めす当たり700~800個の卵を産下する。それらの卵は
ほとんど全部がふ化する。本虫の伝播はサトウキビ刈
株、収穫残きや、生育サトウキビによってなされる。
天敵類はTDCでは本虫を多数殺す。しかし経済的に
満足しうる程度にカイカラムシをおさえることはない
ようである。天敵の中ですぐれているものはテントウ
ムシ科の一種 (*Chilocorus nigrinus*) と寄生性のカ
ンシャシロカイガラトビコバチ (*Adelencyrtus mi-
yarai*) がある。化学的防除は困難で、特に十分生長
したサトウキビでは困難である。感受性品種から耐性
あるいは抵抗性品種への切りかえは本虫に対しては極
めて長い期間の調査を必要とするであろう。現在の苗
の温湯処理、本虫の分散防止手段、低刈りや収穫残さ
の処理は被害の軽減に役立つであろう。(抄録 東)